

2012 年調査の全体的な回答傾向

堺 完

1. はじめに

2008 年度から社会学部を卒業する学生に対して行われている卒業生アンケートであるが、2012 年 3 月実施分で第 4 回目となる。このアンケートは、2012 年 3 月 21 日の卒業式に参加した学生に対して実施し、351 名の回答が得られた。以下、第 4 回目の調査結果について、「回答した学生の特徴」や「授業・学生生活」、「就職や将来への展望」、「学生生活全体の意見・感想」の 4 点に分けて、それぞれ回答傾向について述べていく。

2. 回答した学生の特徴

2-1. 学生の基本的な情報

有効回答として 351 名のデータが得られているが、まずは回答した学生の特徴について述べていく。なお、以下に記載するパーセントは有効パーセントを記載する。

問 1 では性別を聞いているが、「男性」が 160 人 (45.7%)、「女性」が 190 人 (54.3%) となっている。問 2 では所属学科を聞き、「社会学」24.9%、「社会福祉学」26.9%、「メディア学」20.0%、「産業関係学」17.7%、「教育文化学」10.6%となっている。

表 1 学科別回答数

	社会学	社会福祉学	メディア学	産業関係学	教育文化学	合計
男(N=160)	25.0%	20.6%	21.3%	25.0%	8.1%	100.0%
女(N=190)	24.7%	32.1%	18.9%	11.6%	12.6%	100.0%
全体(N=350)	24.9%	26.9%	20.0%	17.7%	10.6%	100.0%

問 3 では入学年度を聞いている。「2008 年度生」が 299 人 (86.7%) であり、約 9 割を占めている。ついで、「2007 年度生」33 人 (9.6%) が多かった。問 4 では自宅／下宿別について聞いているが、「自宅生」が 195 人 (55.9%)、「下宿生」が 154 人 (44.1%) であり、自宅から通っている学生の方が多い。

問 9 では高校の所在地を聞いている。47 都道府県を 10 の地域に分けた分布は、関西が 70.9%と突出して多く、ついで東海の 8.7%が続いている。関西の中で特に多いのは、全体のうち「大阪」が 30.5%、「京都」が 20.1%、「兵庫」が 11.6%である。

表 2 高校の所在地（地域別）

地域	度数	パーセント
北海道	3	0.9%
東北	1	0.3%
関東	10	2.9%
甲信越	6	1.7%
東海	30	8.7%
北陸	7	2.0%
関西	244	70.9%
中国	8	2.3%
四国	7	2.0%
九州	18	5.2%
外国	10	2.9%
合計	344	100.0%

問 10 では、高校 3 年時の成績を聞いている。全体の傾向として、「上の方」22.0%、「中の上」27.3%、「中くらい」22.6%、「中の下」15.8%、「下のほう」15.8%だった。

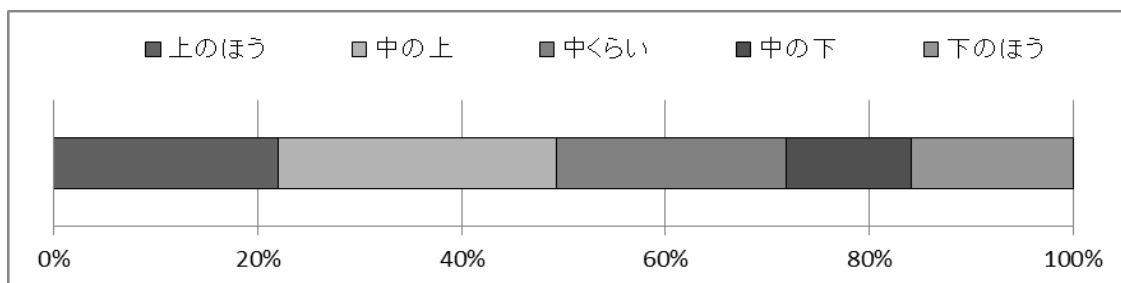


図 1 高 3 時の成績 (N=341)

問 11 は、18 歳時の家の経済状況を尋ねている。「豊か」と答えたのは 7.6%、「やや豊か」が 28.4%である。「ふつう」は 52.2%で回答としては最も多い。「やや貧しい」8.5%、「貧しい」3.2%だった。以上より、35%程度の学生が豊かな家庭状況だったと答え、家庭状況は普通であるとした学生は半数以上いることがわかる。

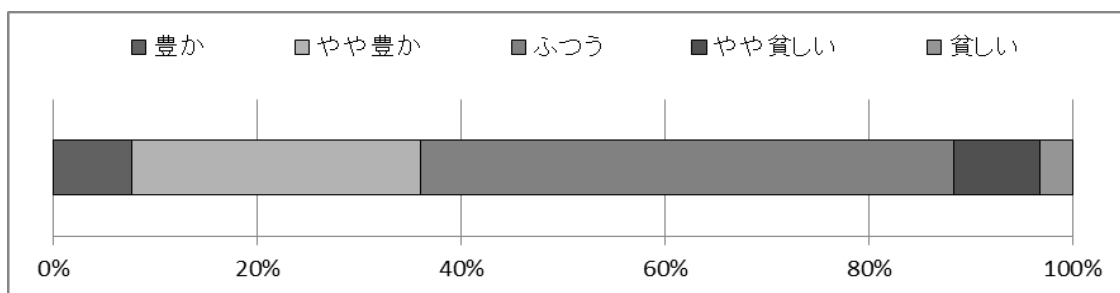


図 2 18 歳時の家の経済状態 (N=341)

2-2. 学生の入試関連情報

続いて問 5 である。ここでは本学の志望順位について尋ねているが、「第一志望」が 68.3%、「第一志望以外 (国公立志望)」が 24.0%、「第一志望以外 (私立他大志望)」7.7% である。約 7 割の学生が第一志望で本学に進学している。性別で志望順位を見ると、男性では第一志望 57.5%、第一志望以外 (国公立志望) が 30.0%、第一志望以外 (私立他大志望) 10.6% となっているが、女性ではそれぞれ 75.8%、18.9%、5.3% となっている。これらより、女子学生の方が第一志望として本学に進学する傾向にあるとわかる ($p<0.01$)。

表 3 志望順位

	第一志望	第一志望 (国公立志望)	第一志望以外 (私立他大志望)	合計
男(N=160)	59.4%	30.0%	10.6%	100.0%
女(N=190)	75.8%	18.9%	5.3%	100.0%
合計(N=350)	68.3%	24.0%	7.7%	100.0%

問 6 では現役・浪人について聞いている。これによると現役が 68.9%、浪人が 26.3%、その他 4.9% である。性別で見ると、男子学生は現役 57.5%、浪人 38.1%、その他 4.4% であり、女子学生は現役 78.4%、浪人 16.3%、その他 5.3% であった。これより女子学生の方が現役率が高くなっている ($p<0.01$)。

表 4 現役/浪人

	現役	浪人	その他 (編入、社会人など)	合計
男(N=160)	57.5%	38.1%	4.4%	100.0%
女(N=190)	78.4%	16.3%	5.3%	100.0%
合計(N=350)	68.9%	26.3%	4.9%	100.0%

問7では入試形態を聞いている。全体の傾向として、「一般・センター」68.0%、「推薦」8.3%、「内部推薦」18.9%、「留学生」2.6%、「その他」2.3%となっている。性別で見ると、男子学生は、「一般・センター」85.0%、「推薦」6.2%、「内部推薦」6.9%、「その他」1.9%と「一般・センター」入試で進学してきた人が多い。対して女子学生では「一般・センター」53.7%、「推薦」10.0%、「内部推薦」28.9%、「留学生」4.7%、「その他」2.6%であった。これらより、男子学生の方が女子学生より「一般・センター」で進学してきた割合が高く、女子学生は男子学生より「推薦」や「内部推薦」の割合がやや多くなっていることがわかる ($p<0.01$)。

表5 入試区分

	一般・センター	推薦	内部推薦	外国人留学生	その他	合計
男(N=160)	85.0%	6.3%	6.9%	0.0%	1.9%	100.0%
女(N=190)	53.7%	10.0%	28.9%	4.7%	2.6%	100.0%
合計(N=350)	68.0%	8.3%	18.9%	2.6%	2.3%	100.0%

2-3. 学生の成績

問8ではGPAスコアを尋ねている。全体的な傾向として、「3.00-3.49」が一番多い26.7%であった。「3.50以上」の5.5%と合わせるとGPAスコア3.0以上が3割以上いることになる。「2.00-2.44」と「2.50-2.99」はともに24.2%だった。なお、「1.50-1.99」は11.8%、「1.49未満」は7.6%であり、GPA2.0未満が2割弱いることもわかる。性別でGPAの分布を見ると、女子学生は「3.00-3.49」が37.2%、「3.50以上」が7.2%でGPA3.0以上が4割を占めているが、男子学生では「3.00-3.49」が14.0%、「3.50以上」が3.3%と2割を下回っている。反対にGPA2.0以下の男子学生は36.6%である一方、女子学生では5.0%に留まる。これより、性別によってGPAの分布に違いが見られる ($p<0.01$)。

表6 性別のGPA回答分布

	1.49未満	1.50-1.99	2.00-2.49	2.50-2.99	3.00-3.49	3.50以上
男(N=150)	15.3%	21.3%	24.7%	21.3%	14.0%	3.3%
女(N=180)	1.1%	3.9%	23.9%	26.7%	37.2%	7.2%
合計(N=330)	7.6%	11.8%	24.2%	24.2%	26.7%	5.5%

学科別傾向をグラフで見ると、有意差は確認できないものの、学科によって分布の傾向が違っていた。まず「社会福祉学科」と「メディア学科」のGPA3.0以上の割合が学科内で4割を超えている。分布図を見ると「社会学科」は中間に分布の中心が来ているが、「社会

福祉学科」と「メディア学科」、「教育文化学科」では分布がやや右寄りに、「産業関係学科」はやや左寄りに分布が偏っていることがうかがえる。

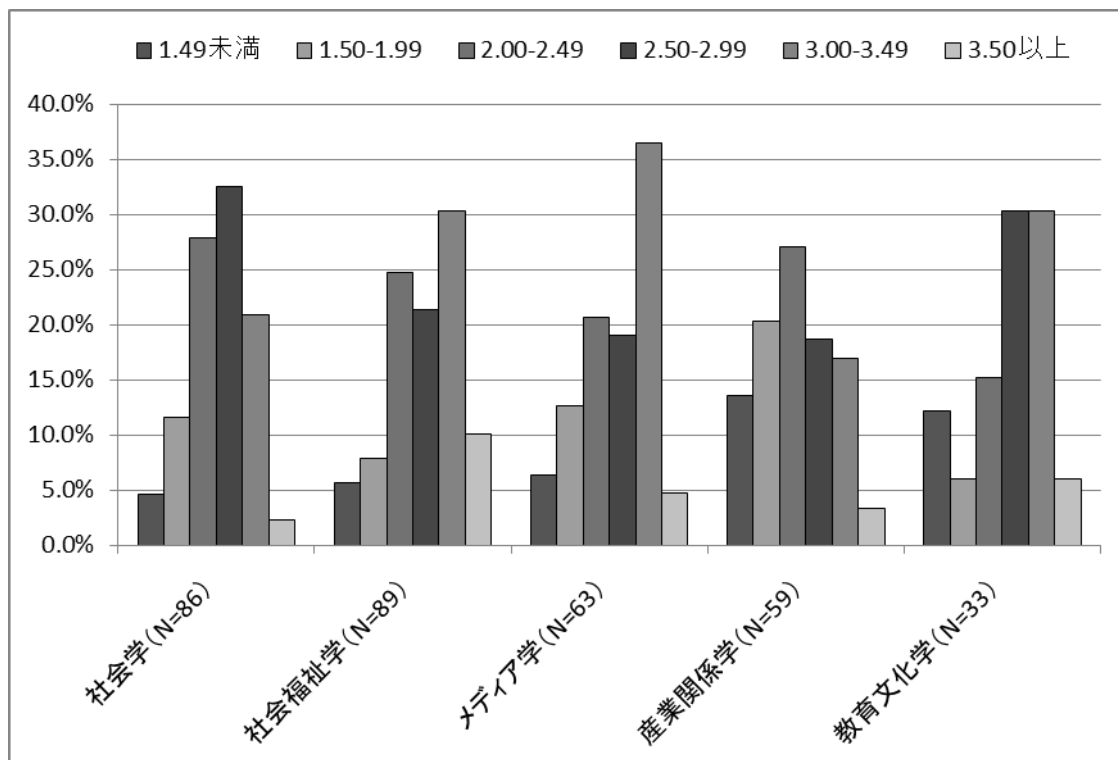


図 3 学科別 GPA 回答分布

3. 授業や学生生活の実態

社会学部に入学し、4年間の学びを終えた学生たちは一体どのような経験を積んで、そこからどのようなものを獲得し、それぞれの学科の教育や学生生活全般を評価しているのだろうか。ここからは授業や学生生活に関わる設問の回答傾向について記述していくことにする。

3-1. 授業満足度

問 12 では大学の授業について、「ファーストイヤーセミナー」、「3-4年次のゼミ」、「大学での授業全般」の満足度を聞いている。まず「ファーストイヤーセミナー」は7割の学生が「満足」「どちらかといえば満足」と回答している。次に「3-4年次のゼミ」は55.7%の学生が「満足」と回答し、「どちらかといえば満足」の30.0%を含めると、85%以上の学生がゼミ活動に満足したとかがえる。「大学での授業全般」は「満足」「どちらかといえば満足」の合計は72.2%であり、概ね大学教育に満足していると予想される。

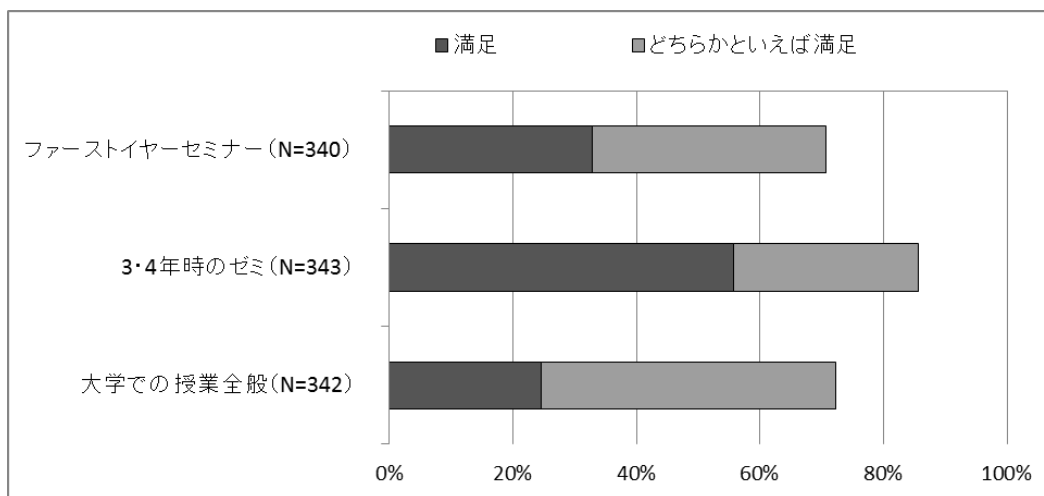


図 4 大学授業の満足度

3-2. 在学中の取得資格

問 13 では社会学部に在学する中で取得可能な資格について、学生が取得したか否かを尋ねている。一番取得が多かったのは、「福祉関係の資格」の 16.6%であり、これに「教員免許」取得の 14.1%が続く。これ以外の資格取得については、「図書館司書資格」が全体の 3.2%、「博物館学芸員資格」は 1.1%、「社会調査士」8.7%、「その他の資格」2.5%となっている。在学時に資格を「取得したものはない」と回答した全体の 59.2%である 164 人だった。

3-3. 教員についての評価

問 14 は教員についての意見を 6 項目で聞いている。どの項目も「そう思う」+「ややそう思う」の合計割合が 7 割以上であり、教員に関して好感を持っていたとわかる。特に「興味深い知識を教えてくれる」では 93.6%の学生が「思う」と答えており、ほとんどの学生が教員から知的な関与があったと思っている。これ以外に肯定的な回答割合を順に示すと、「的確なアドバイスをくれる」の 88.4%、「学問の面白さを教えてくれる」84.0%、「気軽に相談できる」82.0%、「親見になって相談にのってくれる」83.8%、「研究の厳しさを教えてくれる」78.3%となっている。研究についての関与のみ他の項目に比べて数値が低いけれど、これらの結果から学生は教員から学術的なかわり合いがあったと思うのと同時に適切なサポートや助言があったと感じていると考えられる。

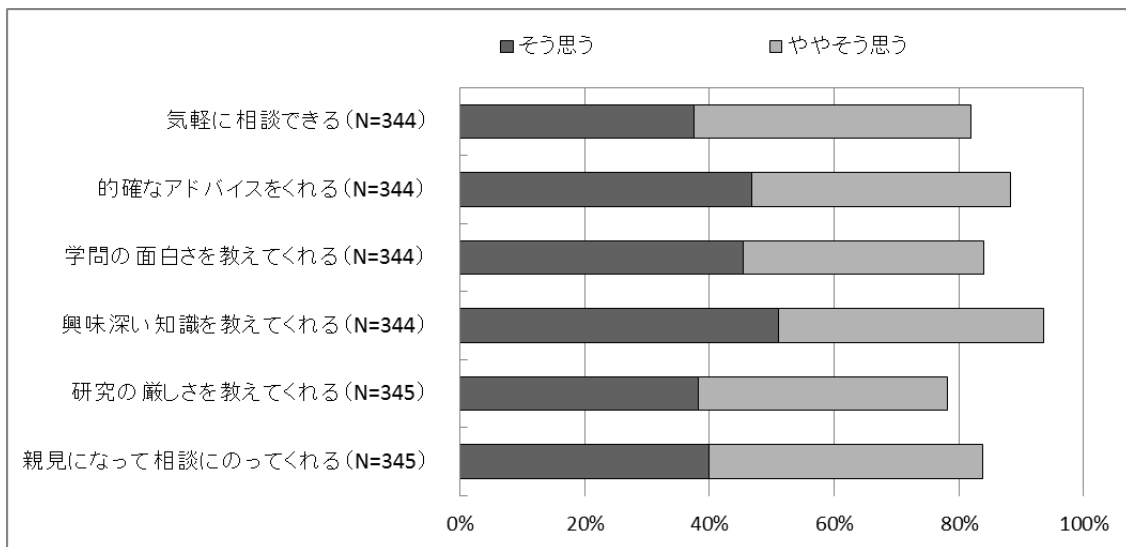


図 5 教員に対する評価

3-4. 授業等での取り組み

問 15 では授業等での取り組み状況について答えてもらっている。「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計割合が高い順に見ていくと、「卒業論文」83.4%、「ゼミ発表の準備」80.6%、「夢中になって受けた授業がある」79.8%、「期末テスト・レポートの準備」77.5%と続いている。卒論やゼミ、期末試験やレポートなどは多くの学生が積極的に取り組んでいたと答えている。また 8 割近くの学生が「夢中になって授業を受けた経験がある」と答えていることにも注目すべきである。「ディスカッションに参加」については 64.1%の学生が「あてはまる」としており、ゼミやその他の授業でディスカッションの機会が担保されていることがうかがえる。59.5%の学生が「授業に遅刻・欠席」をしたことがあると答えている。「教員に質問」するは 47.7%の学生が「あてはまる」としている。前の設問で相談のしやすさを感じているものの、授業内容に関しての質問に対しては躊躇して質問できていないのではないかと考えられる。「良い成績をとりにくい選択科目は履修しない」は 43.7%の学生が「あてはまる」と答えている。4 割の学生が単位取得のしやすさで科目選択をしていると考えられるが、裏を返せば、半数以上の学生は成績の取りやすさだけで授業選択をしていないことになる。「授業の予習・復習」はこの設問では最も低い 35.6%であった。ゼミ等の少人数授業や試験に対しての準備は行うが、通常の授業に対しては課題等が出ないと予習・復習といった学習は行なっていない可能性がある。

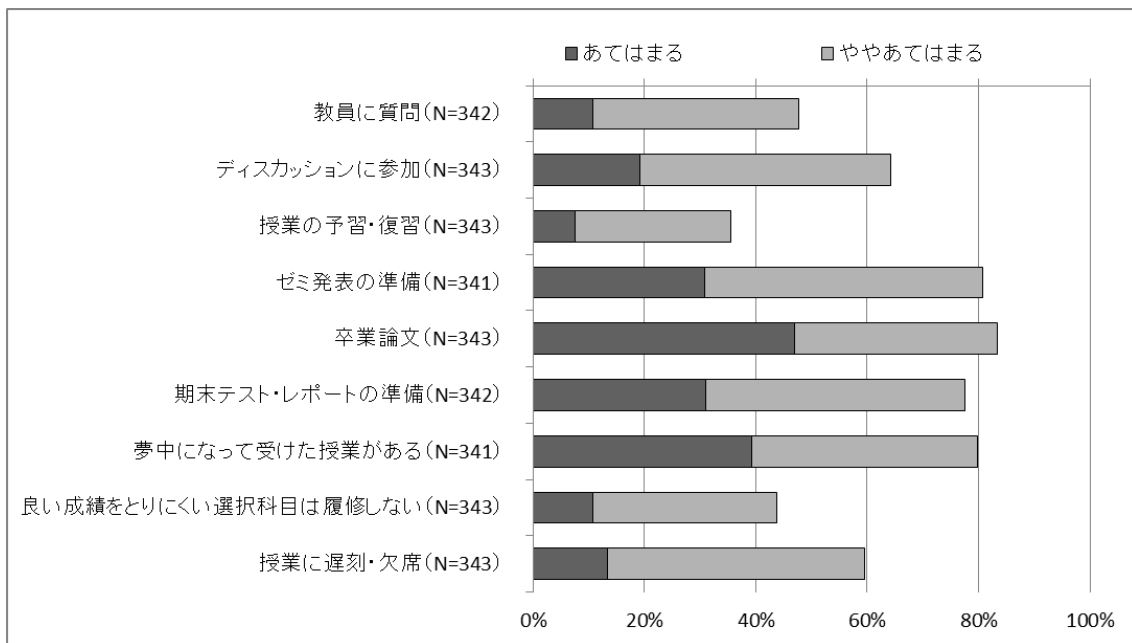


図 6 授業等の取り組み

3-5. 知識・技能の向上度

問 16 では入学してから回答時点までの知識・技能の向上度合いについて尋ねている。「向上した」と「どちらかといえば向上した」の合計で高い順で示すと、「根拠の示し簡潔に書く」90.4%、「物事を多面的に考える」89.7%、「文献や資料を読み解く」89.5%、「考えや意見を他人に伝える」86.3%、「文献や資料を探す」85.6%であり、ほとんどの学生が、書く能力や思考力、読解力、コミュニケーション力、情報収集能力などが十分向上したと答えている。その一方で、「数量的に分析する」ことに関しては向上したと答えた学生が 57.3%、「外国語」についても 43.1%にとどまっている。

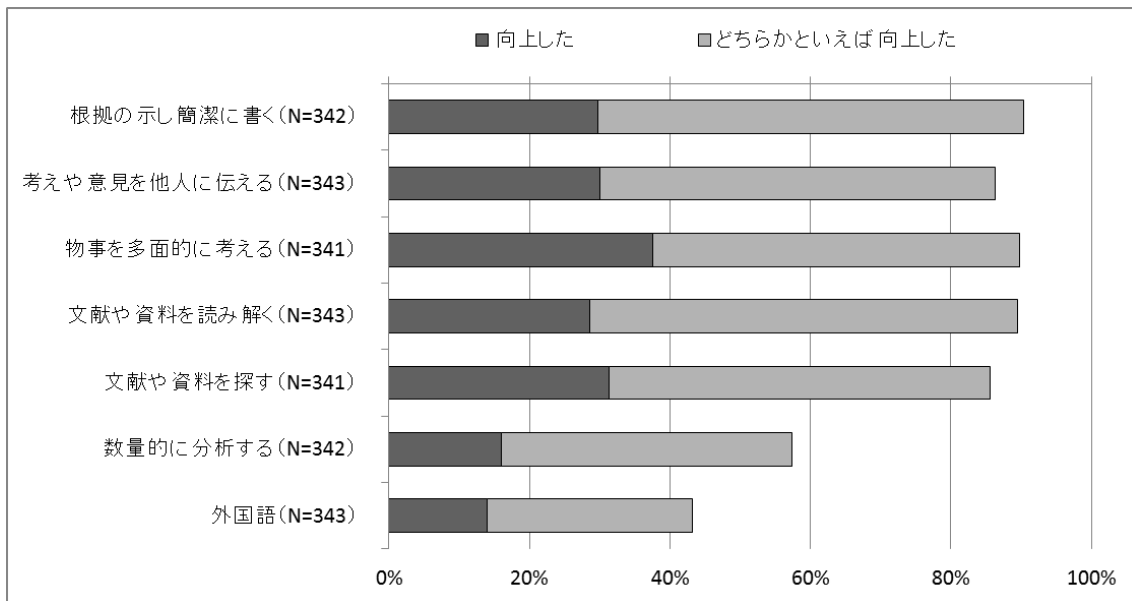


図 7 知識・技能の向上度

「数量的に分析する」「外国語」の2項目に関して、学科別の傾向で見ると、まず「数量的に分析する」については、社会学科に所属する72.4%の学生が、ついで産業関係学科の学生の65%が高まったと回答している。この他の学科は向上率が低いことから、この2学科が他の学科よりこの能力に関しては養成していることになる ($p<0.05$)。「外国語」に関しても、教育文化学科が63%と他学科より「向上した」と答えた割合が高くなっている。社会学科やメディア学科、産業関係学科は4割台で平均前後であるが、社会福祉学科は他学科より外国語能力の向上割合が低くなっている ($p<0.01$)。

表 7 学科別「数量的に分析する」の向上度

	向上した	どちらかといえば 向上した	変わらない	低下した	合計
社会学(N=87)	20.7%	51.7%	26.4%	1.1%	100.0%
社会福祉学(N=91)	11.0%	37.4%	45.1%	6.6%	100.0%
メディア学(N=68)	13.2%	38.2%	45.6%	2.9%	100.0%
産業関係学(N=60)	23.3%	41.7%	33.3%	1.7%	100.0%
教育文化学(N=36)	11.1%	30.6%	55.6%	2.8%	100.0%
合計(N=342)	16.1%	41.2%	39.5%	3.2%	100.0%

表 8 学科別「外国語」の向上度

	向上した	どちらかといえば 向上した	変わらない	低下した	合計
社会学(N=87)	6.9%	33.3%	40.2%	19.5%	100.0%
社会福祉学(N=91)	16.5%	16.5%	49.5%	17.6%	100.0%
メディア学(N=68)	11.8%	33.8%	32.4%	22.1%	100.0%
産業関係学(N=61)	23.0%	24.6%	31.1%	21.3%	100.0%
教育文化学(N=36)	13.9%	50.0%	30.6%	5.6%	100.0%
合計(N=343)	14.0%	29.2%	38.5%	18.4%	100.0%

3-6. 物事への理解の深まり

問 17 は入学時点と比較して物事への理解の深まりがどの程度変化したか 11 項目にわたり聞いている。特に高いものとしては、「社会のメカニズム」であり、89.4%の学生が「深まった」と回答している。社会学部の学生として概ねこの項目に関しては理解を深めているようである。これに続いて「深まった」の割合が 7-8 割を超えているのは、「マイノリティ」85.0%、「人間の心理」80.6%、「異文化」80.4%、「異性」76.0%である。近年よく言われている新しいタイプの教養的な内容に関しては多くの学生が理解を深めている。その一方で、従来から重視されてきた教養的な内容については、新しい教養的な内容に比べて理解の深度がやや下がっている。例えば、「政治のメカニズム」64.8%、「経済のメカニズム」64.8%、「哲学や思想」66.4%、「日本や世界の歴史」54.7%と続く。政治・経済や哲学、歴史といった部分については一般科目のみならず、専門科目の中でも学生の理解を深めるような機会が求められているのかもしれない。「さまざまな文学作品」(50.9%)や「美術や音楽などの芸術」(47.5%)といった文芸に関しても他の項目と比べて、学部教育の中では接する機会が少なく、十分に理解が深まらなかった可能性がある。

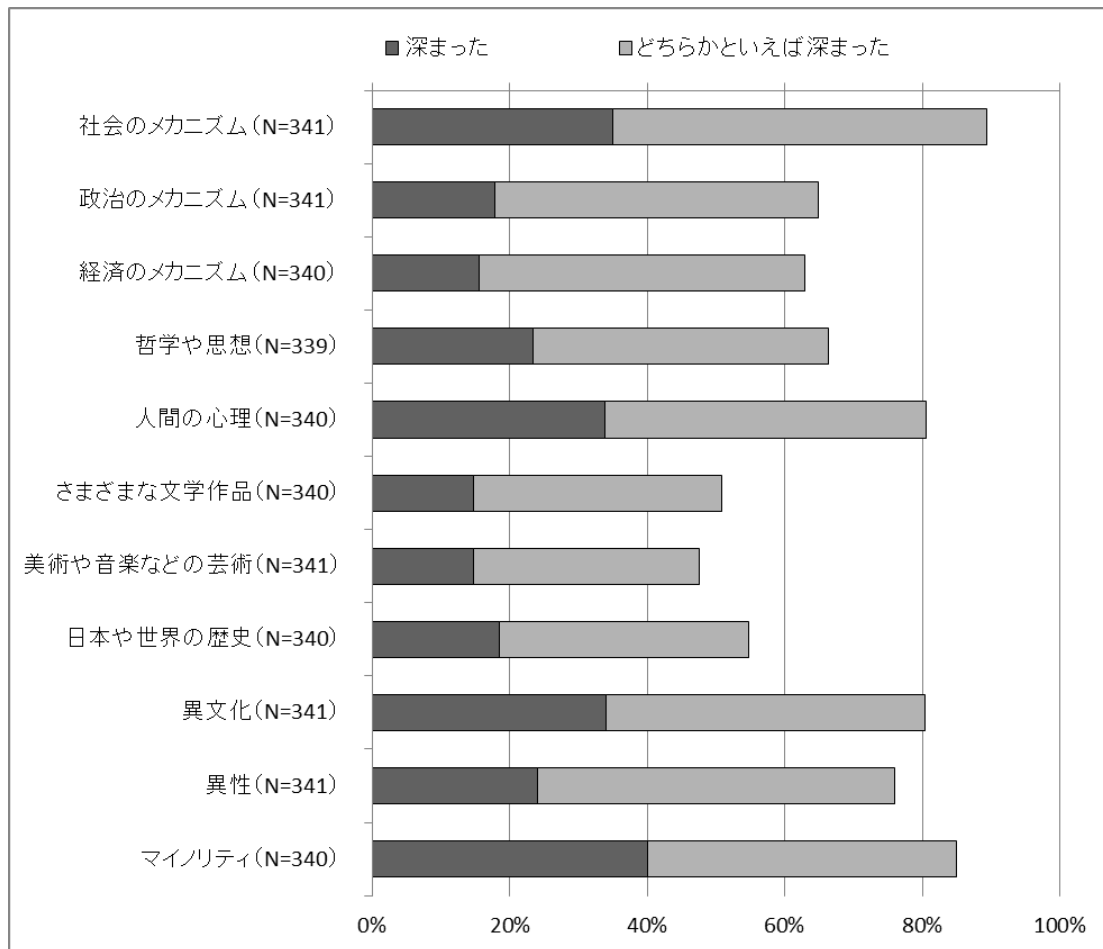


図 8 物事への理解の深まり

3-7. 在学中の活動・経験

問 18 では、在学中の活動についての頻度を 13 項目で尋ねている。「よくした」と「ときどきした」の割合が高い項目は、「アルバイト」87.9%、「就職活動」81.1%、「経済や政治のニュースをみる」71.9%、「部活・サークル活動」70.9%となっている。この 4 つの項目に関しては多くの学生が日常的によく行なっていたとわかる。授業に関連することでは、「授業にかかわる勉強」が 68.2%、「学問的な本を読む」が 60.5%となっており、6・7 割の学生は学習に関してもよくしていたという認識を持っている。これら以外に半数の学生が行ったと答えている項目は、「小説を読む」61.8%や「海外旅行へ行く」60.0%などであり、趣味につながる読書習慣があることや、在学中の海外渡航経験がある学生が多いことなどがわかる。半数以下の学生しか行っていないものとしては、「美術館や博物館へ行く」の 46.8%、「資格試験の勉強」の 41.2%、「ボランティア活動」の 36.9%、「インターンシップ」の 22.1%、「公務員・教員採用試験の勉強」の 21.8%となっている。これらは特定の目的や目標を持った学生のみ行っているものであり、やや低い数値になっていると考えられる。

問 18 の内容に付随して、問 18-1 では一番熱心に取り組んだもの、問 18-2 では一番時間

をかけたものを聞いている。どちらの間についても、「アルバイト」、「部活・サークル活動」、「授業にかかわる勉強」の順で時間と労力をかけて取り組んだものとして挙げている。

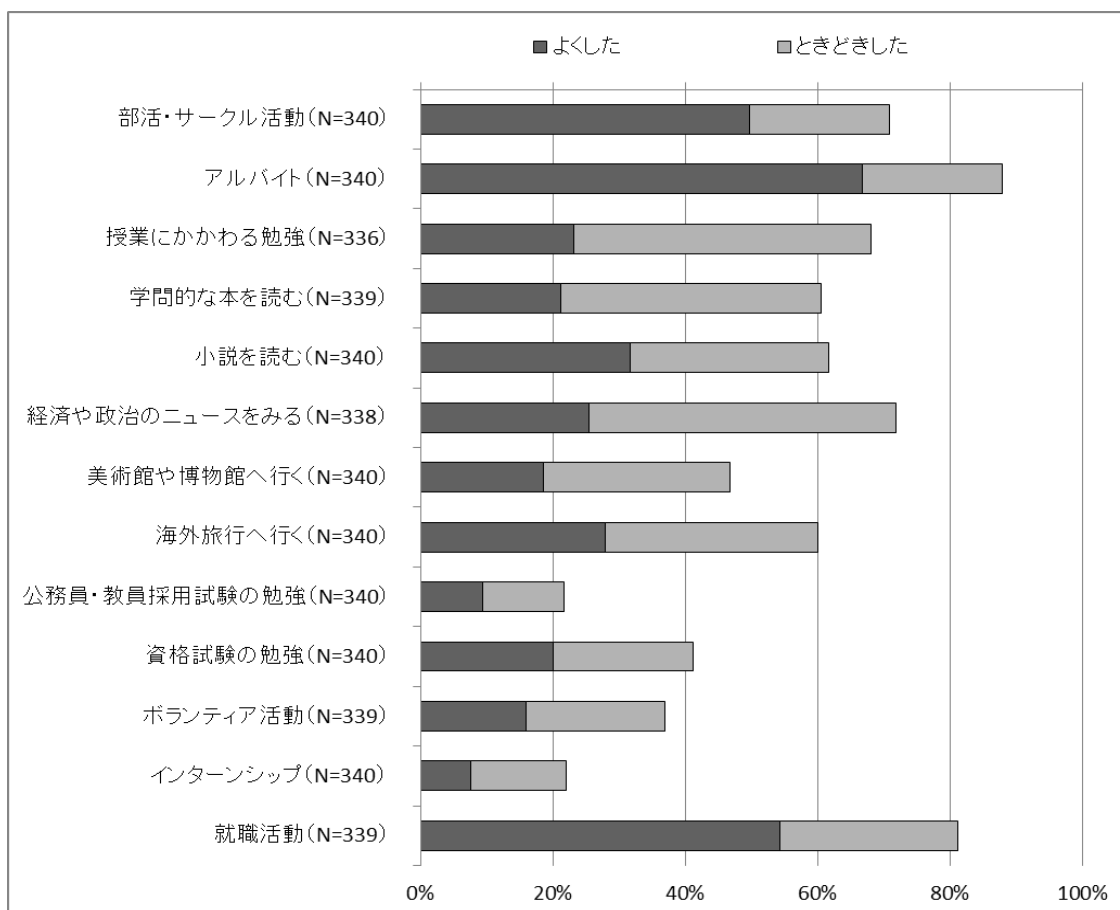


図 9 在学中の活動や経験の頻度

4. 就職や将来への展望

ここからは社会学部の学生の就職活動の実態や就職先について、また将来的な展望（生き方）についての回答傾向を記述していく。

4-1. 就職活動の実態

問 19 では就職活動の有無を尋ねている。就職活動をしたに「はい」と答えたのは、全体の 88.6%であり、ほとんどの学生が何らかの就職活動を行っていた。

表 9 就職活動の有無

	就職活動あり	就職活動なし	合計
男(N=145)	86.9%	13.1%	100.0%
女(N=170)	90.0%	10.0%	100.0%
合計(N=315)	88.6%	11.4%	100.0%

4-1-1. 就職活動の開始時期

問 19-1 では就職活動時にはじめて「A.ガイダンス」「B.就職情報サイト登録」「C.エントリーシート提出」「D.人事面接」を行ったり受けたりした時期を聞いている。

まず、「A.ガイダンス」について、図 10 を見ると「2010年10月」が30%、「2010年11月」で13%、「2010年12月」で12%であり、就職活動が本格化する3ヶ月で全体の50%を占めている。

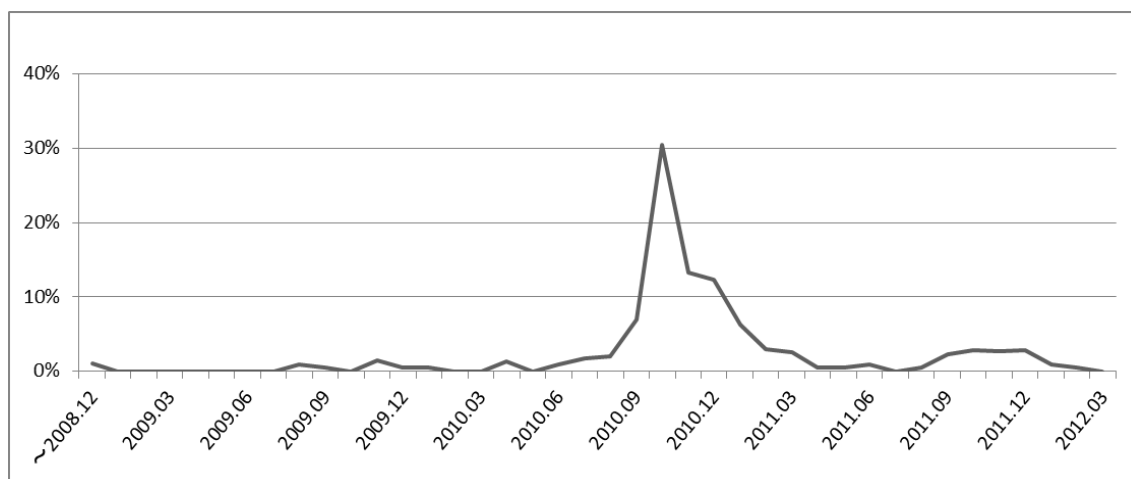


図 10 ガイダンスの参加時期 (N=212)

続いて「B.就職情報サイト登録」について、図 11 を見ると回答が多かった順に「2010年6月」が10%、「2010年9月」が8%、「2010年10月」が35%、「2010年11月」が9%となっていた。情報サイトが翌年の仕様が変わる時期6月に1割程度の人が登録を済ませ、その後就活が本格化する秋の時期に登録が集中すると考えられる。

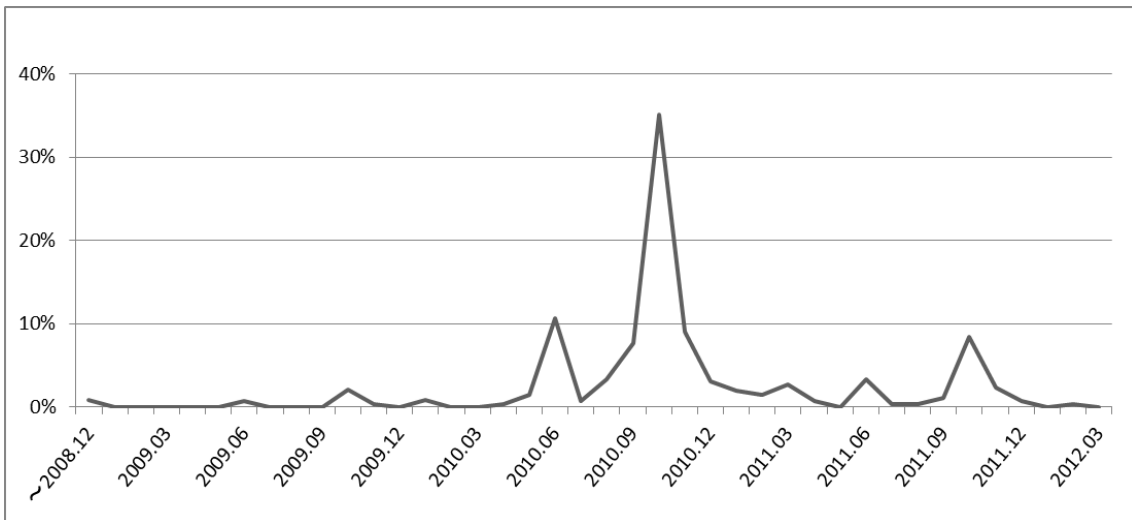


図 11 就職情報サイトへの登録時期 (N=268)

「C.エントリーシート提出」について図 12 を見ると、プレエントリーが始まる頃である「2010年10月」5%と「2010年11月」6%であり、その後本格的なエントリーが始まる「2010年12月 (27%)」から「2011年1月 (20%)」にかけて増加し、「2011年2月」が12%となっている。

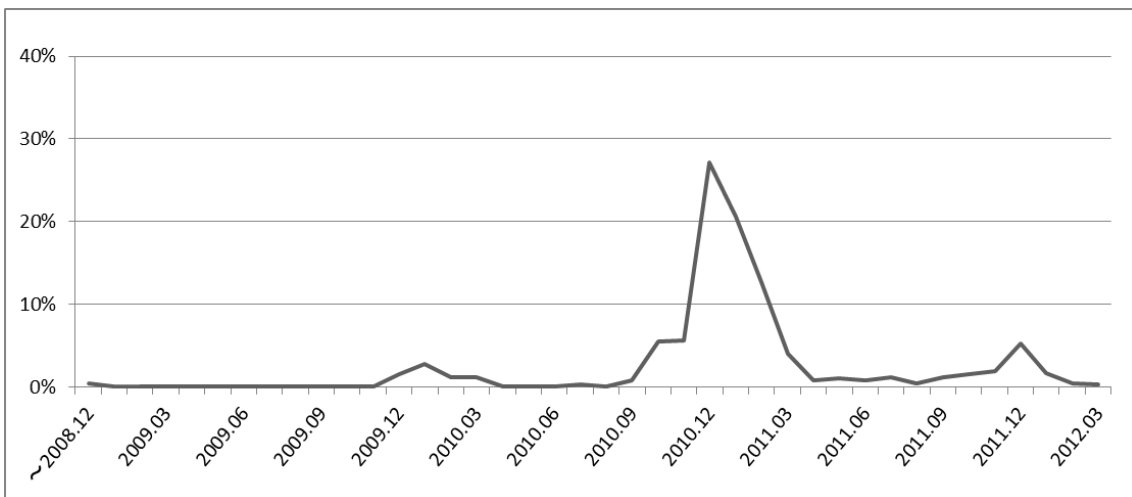


図 12 エントリーシート提出時期 (N=262)

図 13 の「D.人事面接」に関しては、「2010年10月」から「2010年12月」までに合わせて15%の人が初めて面接を受けた回答している。年明けて「2011年1月」は15%、「2011年2月」では最も多い20%、「2011年3月」では15%となっており、4月1日以前に少なくとも約7割の学生が面接の経験があったことになる。

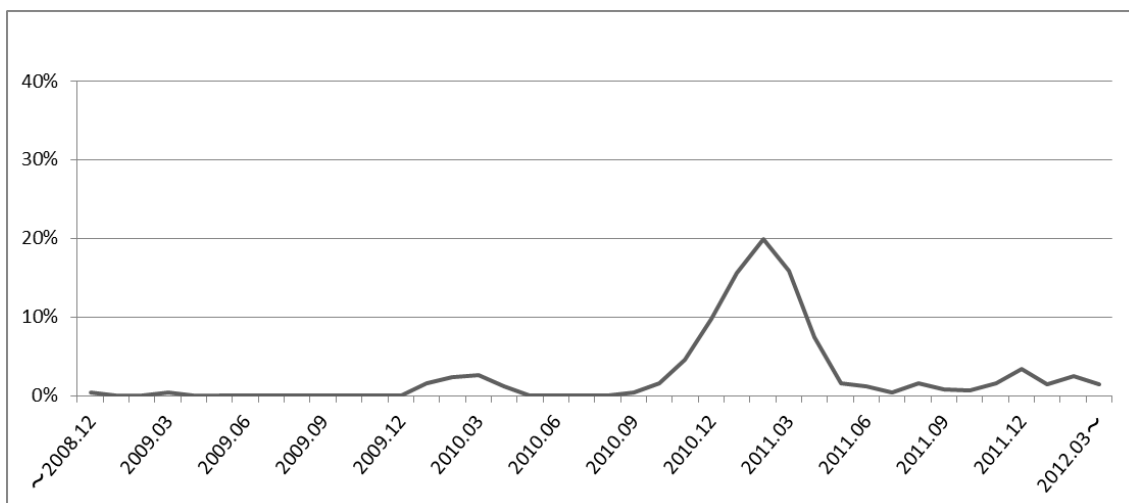


図 13 人事面接の時期 (N=260)

4-1-2. 就職活動初期に重視したこと

問 19-2 では、就職活動の初期に企業選びにおいてどのようなことを特に重視していたか 11 項目で尋ねている。「重視していた」と「少し重視していた」の合計割合が 8 割を超えた項目は「仕事内容の面白さ」の 91.2%、「会社内の雰囲気の良い」89.0%、「自分の能力を發揮できること」83.9%、「長く勤められる会社であること」80.5%の 4 つであった。ここから職業選択時に仕事の内容とその内容に自身の能力が發揮できるかが重要であり、また企業の選択するときは職場の雰囲気や勤続年数などに注目しているようである。これ以外に「福利厚生が充実していること」75.9%、「大企業や有名企業であること」71.2%、「給与が良いこと」69.6%も数値が高く、福利厚生をしっかりしている会社や大規模もしくは知名度のある会社、給与面で不安がない会社や業種といったことなどが選択に影響を与えている可能性がある。一方で「重要」だとした学生が半数以下のものは、「地元の近くで働けること」の 45.5%や「残業が少ないこと」の 41.3%、「資格をいかした仕事ができること」の 30.4%であり、これらについて重視している学生はそれほど多くないようである。

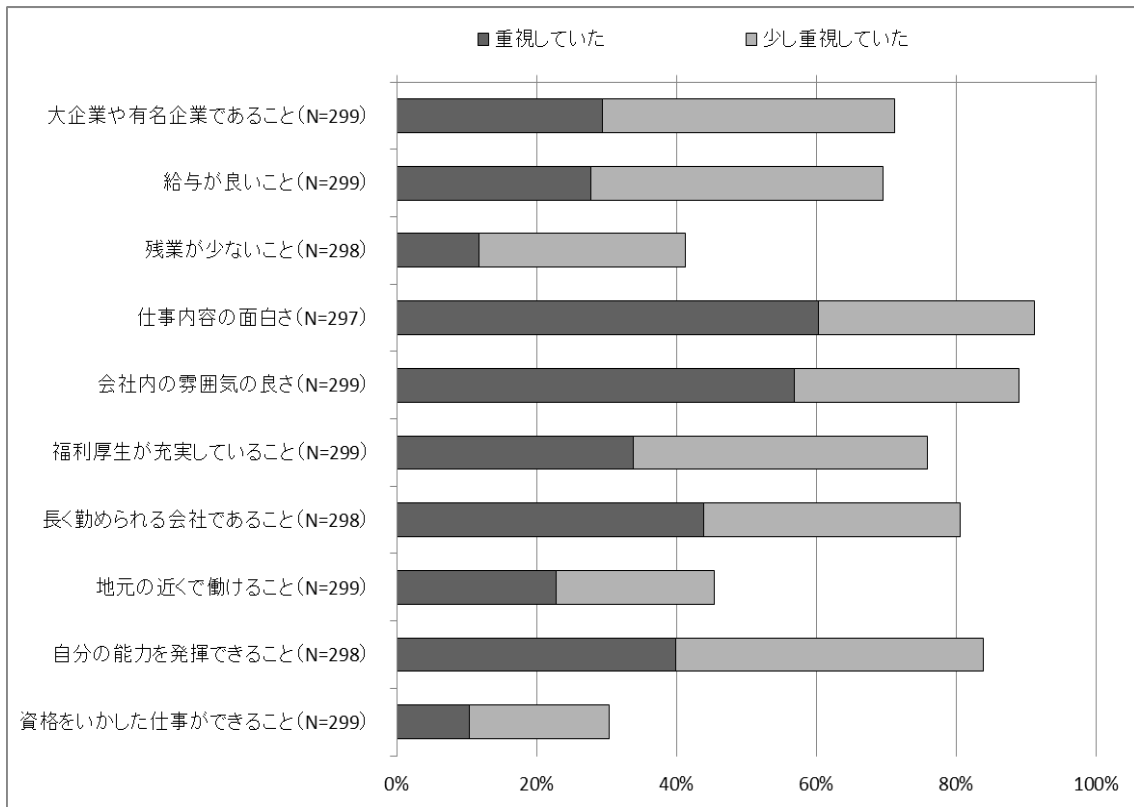


図 14 就職活動初期に重視したこと

4-1-3. 就職活動中の企業との接触

問 19-3 では就職活動時に何らかの接触を持った企業数がどのくらいなのかについて、「A.エントリーシート提出」「B.人事面接の回数」「C.内定数」「D.OB 訪問」「E.リクレーターからの連絡」の 5 点を尋ねている。この設問は数値で回答してもらっているが、図 15 と図 16 は数値を 3 つないしは 4 つのカテゴリーに分けて分布を示したものである。

まず「A.エントリーシート提出」について、「2011 年 3 月」までに送った数は平均 25.6 (SD=20.3) であり、「2011 年 4 月」以降では平均 13.8 (SD=17.8) だった。全体の平均を合算すると、学生は約 40 社にエントリーシートを送っている計算になる。次に「B.人事面接」の回数は、「2011 年 3 月」までの平均 10.5 (SD=10.4)、「2011 年 4 月」以降では平均 9.7 (SD=10.4) となっている。ここから人事面接についても平均で 20 社から受けていることが予想される。

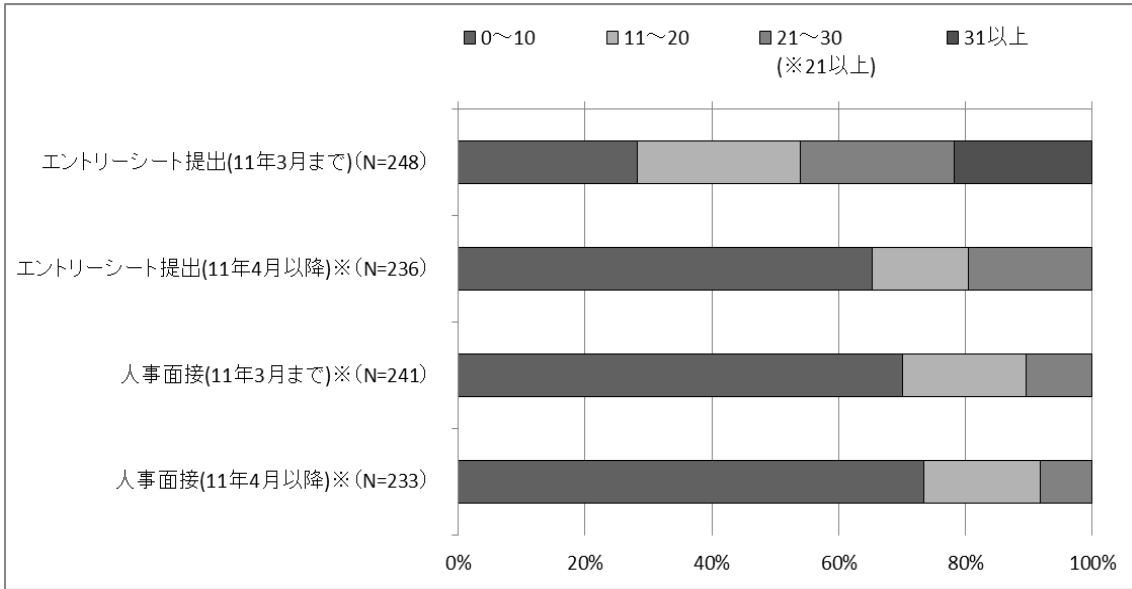


図 15 就職活動中の企業との接触状況①

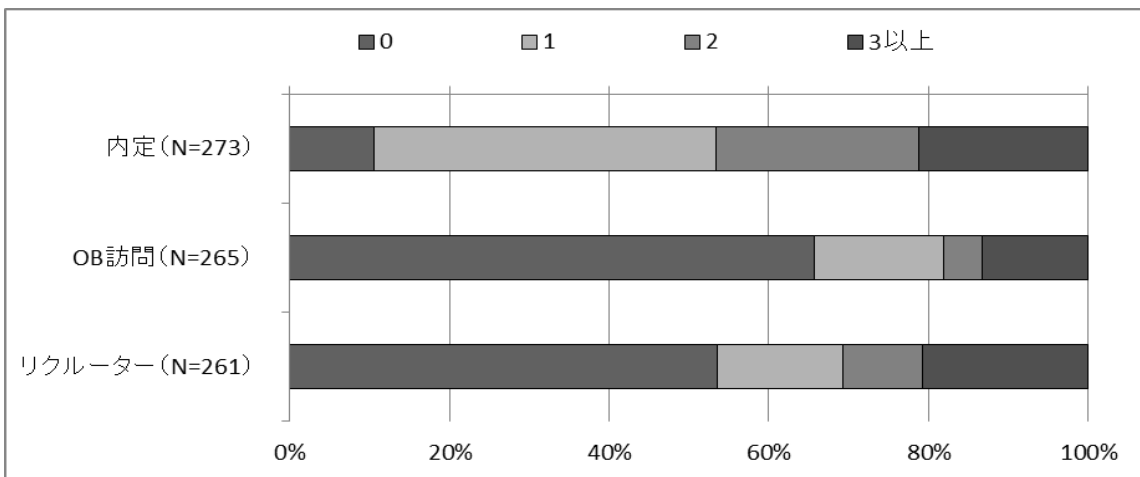


図 16 就職活動中の企業との接触状況②

4-1-4. 内定や就職活動の終了時期、就職活動の期間

問 19-4 では内定を初めてもらった時期はいつかを尋ねている。最も多いのは「2011年4月」の25.2%であり、翌月の「2011年5月」は11.5%、「2011年6月」が16.2%となっており、この3ヶ月間で半数の学生がはじめての内定を得ている。これ以外には「2011年3月」に7.7%、「2011年7月」に7.3%、「2011年8月」に6.0%となっている。

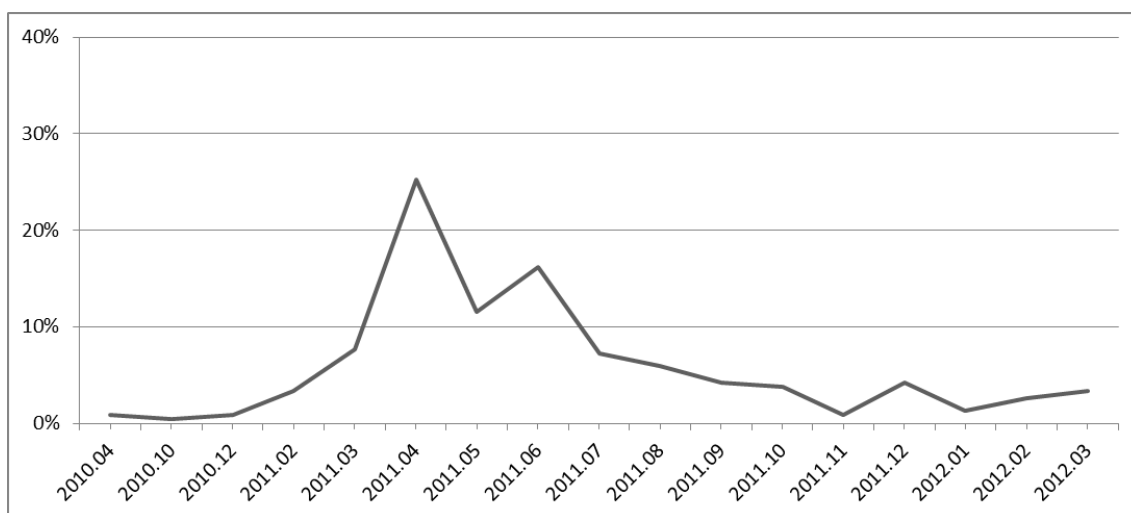


図 17 内定時期 (N=234)

問 19-5 では就職活動の終えた時期はいつなのか答えてもらっている。終えた時期が最も多かったのは「2011年6月」の20.3%だった。ついで「2011年4月」の15.5%、「2011年5月」11.2%、「2011年7月」の10.8%となっている。春採用のピークである4から7月までで就職活動を終えた学生は全体の50%である。

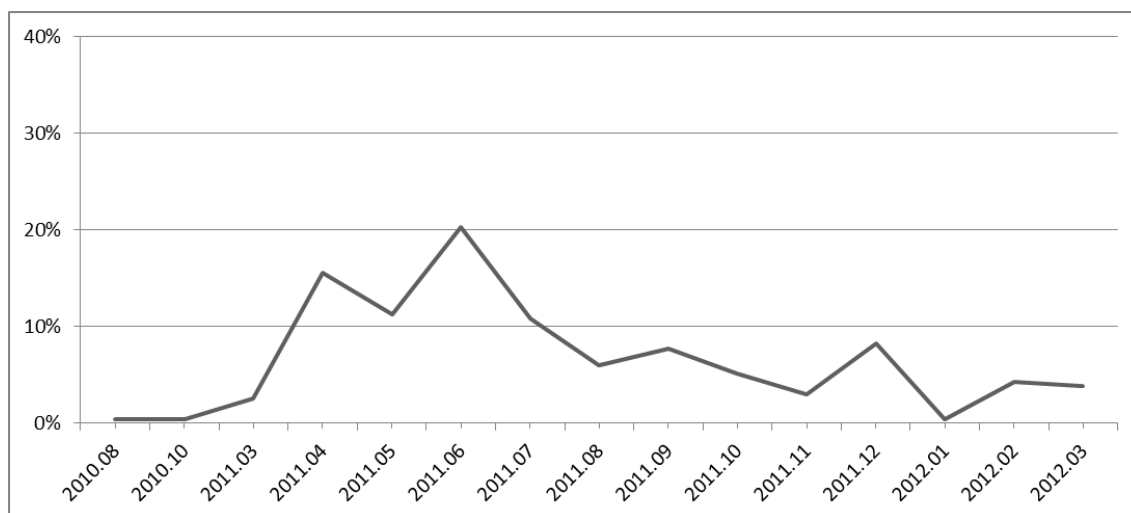


図 18 就職活動終了時期 (N=232)

就職活動の開始時期を問 19-1 「C.エントリーシート提出」とし、終了時期を問 19-5 の結果を用いることで、大まかではあるが学生の就職活動の期間を把握することが可能となる。以下この結果について記述していくが、留意点としてこの分析では問 3 で「2008年度」と記入した学生のみをその対象 (N=205) とし、留年やその他の理由で5年間以上在籍している学生は分析から除いている。表 10 をみると、「6ヶ月」に該当する学生が

16.6%と最も多く、ついで「4ヶ月」が12.7%、「3ヶ月」と「5ヶ月」が8.3%となっている。「0ヶ月」から「6ヶ月」までの就職期間半年以内の学生は全体の半数であることが表からわかる。また「7ヶ月」から「12ヶ月（1年）」では26%であり、エントリーを初めて内定をもらい、1年以内に就職活動を終えている学生は全体の75%であった。なお、エントリーシートを出した時期より就活終了時が早い0ヶ月未満に該当する学生も1割弱いるが、単なる記載のミスか否かはここからは判断できない。

表 10 就職活動期間

就活期間	人数	パーセント
-8ヶ月～-1ヶ月	17	8.3%
0ヶ月	3	1.5%
1ヶ月	4	2.0%
2ヶ月	7	3.4%
3ヶ月	17	8.3%
4ヶ月	26	12.7%
5ヶ月	17	8.3%
6ヶ月	34	16.6%
7ヶ月	15	7.3%
8ヶ月	4	2.0%
9ヶ月	7	3.4%
10ヶ月	10	4.9%
11ヶ月	9	4.4%
12ヶ月	9	4.4%
13ヶ月	3	1.5%
14ヶ月	5	2.4%
15ヶ月	2	1.0%
16ヶ月	3	1.5%
17ヶ月	4	2.0%
18ヶ月	1	0.5%
19ヶ月	1	0.5%
20ヶ月	3	1.5%
24ヶ月以上	4	2.0%
合計	205	100.0%

4-2. 卒業後の進路や就職先について

4-2-1. 卒業後の進路

問 20 では卒業後の進路に関して聞いている。最も多くの学生が回答したのは、「民間企業に正社員として就職」の67.4%であり、次に多いのは「公務員（正規）」の5.9%だった。「大学・大学院に進学」は3.1%である。この時点で「決まっていない」と回答した学生も7.8%いた。

表 11 卒業後の進路

	度数	パーセント
民間企業に正社員として就職	217	67.4%
自営業・家業にはいる	2	0.6%
公務員(正規)	19	5.9%
公立学校教員(正規)	2	0.6%
公立学校教員(非常勤)	5	1.6%
私立学校教員(正規)	1	0.3%
私立学校教員(非常勤)	3	0.9%
派遣、契約社員、臨時職員、 パート、アルバイト	12	3.7%
大学・大学院に進学	10	3.1%
専門学校に進学	7	2.2%
その他	19	5.9%
決まっていない	25	7.8%
合計	322	100.0%

問 20-1 では問 20 において「1. 民間企業に正社員として就職」と回答した学生のみ、就職先の業種を尋ねている。10 人以上いる業種を降順に挙げていくと、「金融・保険・証券」49 人 (22.8%)、「製造」40 人 (18.6%)、「その他のサービス業」27 人 (12.6%)、マスコミ・出版 22 人 (10.2%)、「卸売・小売業」15 人 (7.0%)、「情報・通信・ソフト」と「医療」、「介護・福祉関係」がそれぞれ 14 人 (6.5%) だった。

問 20-2 では就職先の採用コースに関して尋ねている。最も多いのは 167 人 (78.0%) の「総合職」であり、「地域総合職」は 14 人 (6.5%)、「一般職」23 人 (10.7%)、「わからない」が 10 人 (4.7%) だった。ただ、採用コースに関しては男女によって分布に差があり、男性は 95.9%が「総合職」に対して女性は 63.2%にとどまり、また「地域限定総合職」(11.1%)と「一般職」(17.9%)の区分でも女性が多くなっている ($p<0.01$)。

表 12 性別による採用区分

	総合職	地域限定 総合職	一般職	わからない	合計
男(N=97)	95.9%	1.0%	2.1%	1.0%	100.0%
女(N=117)	63.2%	11.1%	17.9%	7.7%	100.0%
合計(N=214)	78.0%	6.5%	10.7%	4.7%	100.0%

問 20-3 就職先の規模（従業員数）を聞いている。最も多いのは「1000-4999 人」の 31.0% であり、これに「300-999 人」の 24.9%、「5000 人以上」の 21.0%と続いている。これより、従業員数 1000 人以上の大規模な企業に就職している学生が 52.0%であることがわかる。

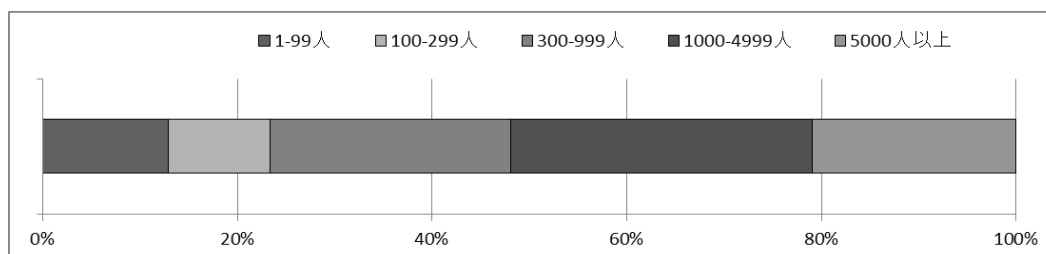


図 19 就職先の従業員数 (N=210)

4-2-2. 就職先の企業について

問 20-4 では就職先が決まった企業について、問 19-2 と同じ項目内容がどの程度あてはまるかを尋ねている。この中で「あてはまる」と「ややあてはまるの」の合計割合が 7 割を超えている項目は、「会社内の雰囲気の良さ」(85.8%)、「仕事内容の面白さ」(79.8%)、「自分の能力を發揮できること」(77.9%)、「長く勤められる会社であること」(77.4%)、「福利厚生が充実していること」(74.1%) の 5 項目であった。就活の結果として選んだ就職先の企業は、先の間 19-2 に重視していた項目とほぼ同じような項目で高い数値を示しており、会社の雰囲気や仕事の面白さ、個人の能力を發揮する機会、長期間の勤続可能などについて「あてはまる」としている。「給与が良いこと」についても 64.3%、「大企業や有名企業であること」も 62.0%、「地元の近くで働けること」も 52.6%であって、半数の学生が就職先にあてはまると評価している。一方で半数を下回るのは「残業が少ないこと」45.5%、「資格をいかした仕事ができること」33.8%の 2 項目であった。

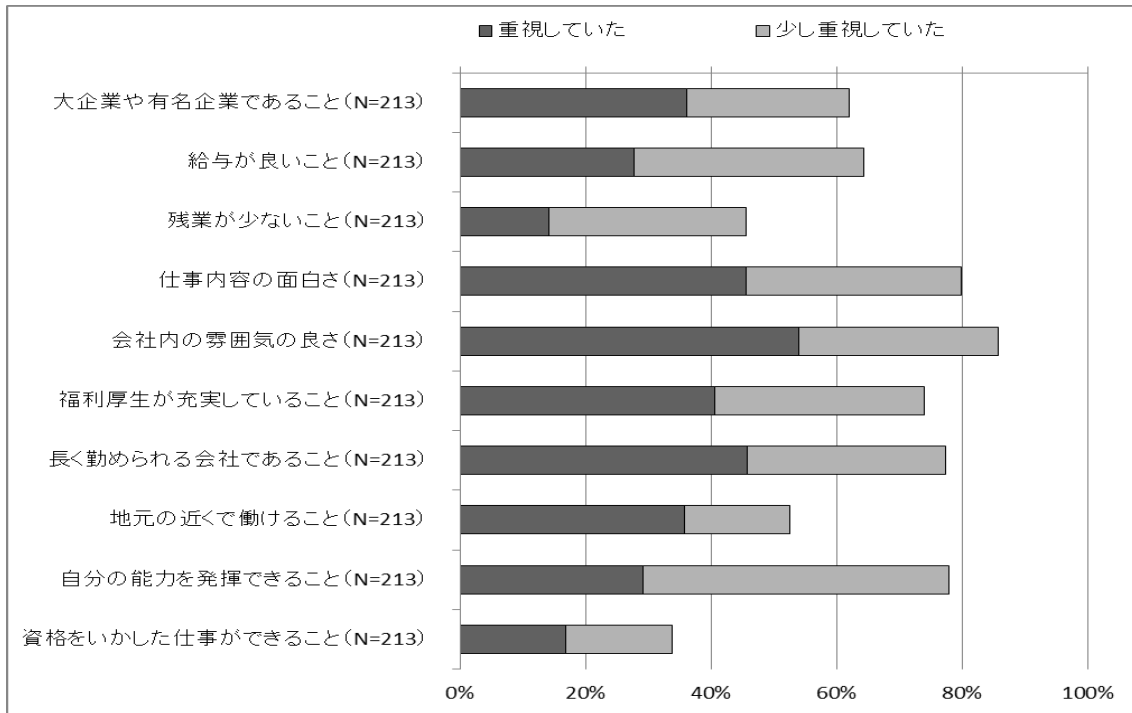


図 20 就職先の企業について

4-2-3. 公務員・教員採用試験の受験

問 21 は在学時に公務員試験や教員試験の受験の有無を聞いている。公務員試験等を受けたのは全体の 14.8%であり、そのうち合格した学生は 6.5%、不合格だった学生は 8.3%だった。非受験者は 85.2%であることからほとんどの学生は受けていないことになる。

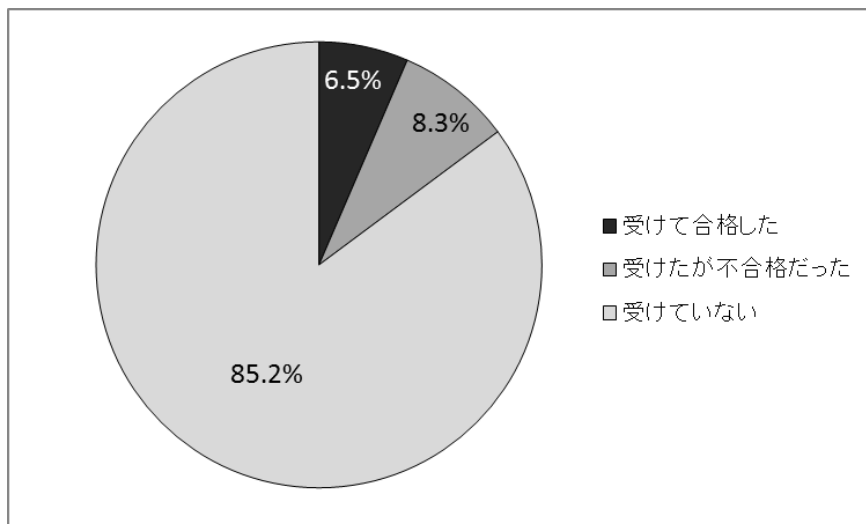


図 21 公務員・教員採用試験の受験 (N=324)

4-2-4. 勤務先や進学先の所在地

問 22 では就職先（研修先）あるいは進学先の所在地を聞いている。これを見ると、最

も多いのは関西地方であり、158人（50.6%）である。この関西地方で特に多いのは、「大阪府」86人（27.6%）、「京都府」46人（14.7%）だった。また関東地方も55人（17.6%）と多いが、そのほとんどは「東京都」47人（15.1%）であった。「大阪」「東京」「京都」の3都市で全体の57%の学生の回答を占めている。

表 13 勤務先や進学先の所在地

地域	度数	パーセント
北海道	0	0.0%
東北	0	0.0%
関東	55	17.6%
甲信越	2	0.6%
東海	20	6.4%
北陸	5	1.6%
関西	158	50.6%
中国	2	0.6%
四国	2	0.6%
九州	1	0.3%
外国	7	2.2%
まだ決まっていない	60	19.2%
合計	312	100.0%

4-2-5. 卒業後の進路の満足度

問 23 では卒業後の進路の満足度を5段階で尋ねている。「満足」は全体の48.1%、「どちらかといえば満足」が28.2%であり、卒業後の進路に対して4分の3以上が満足を示していることになる。反対に何らかの不満を持っている層は「どちらかといえば不満」5.7%、「不満」3.2%であり合わせても1割弱しかいなかった。社会学部を卒業する学生は概ね卒業後の進路に満足していることがうかがえる。

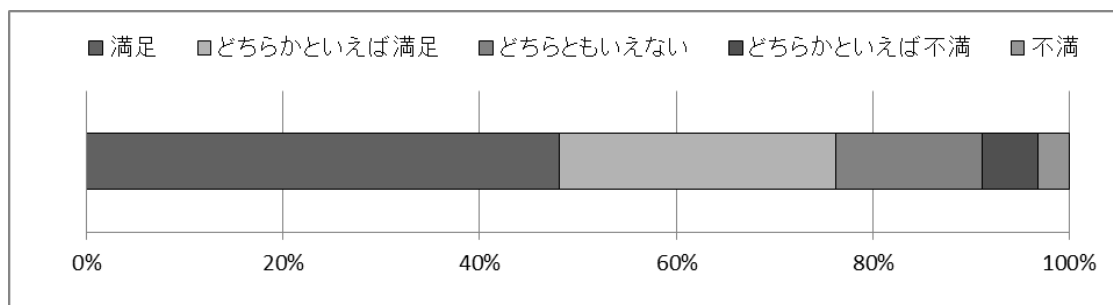


図 22 卒業後の進路の満足度 (N=316)

4-3. 卒業後の生き方や今後の展望

4-3-1. 卒業後の活動について

問 24 では卒業後にやってみたいものについて、あてはまるものすべてに印をつけて回答してもらっている。その結果、「趣味・娯楽のサークル活動」が 58.4%と最も高くなっている。次に高いのは「会社のために働く」の 52.4%であり、この 2 項目のみ半数の学生がやりたいことだと選んでいる。「とくにない」を選んだのが 10.5%から察するに、9割近くの学生はここに上げた項目内容やそれ以外のことを行いたいという思いを持っていることがわかる。

表 14 卒業後の活動予定

	あてはまる	あてはまらない
会社のために働く (N=315)	52.4%	47.6%
NPO・NGO等の社会活動 (N=315)	14.9%	85.1%
地域社会・地元への貢献 (N=315)	27.0%	73.0%
趣味・娯楽のサークル活動 (N=315)	58.4%	41.6%
その他(選択の有無) (N=315)	6.3%	93.7%
とくにない (N=315)	10.5%	89.5%

4-3-2. 今後の生活における重要度

問 25 では、学生が将来生活する上で特に重視していることは何かを探る質問を行なっている。その結果、「重要」と「やや重要」の回答割合が特に高かったのは、「趣味を楽しんだり、教養を高める時間をもつ」の 94.5%と「他人から必要とされる人間になる」の 90.9%である。ここから人生を謳歌するためには、趣味を持ったり教養を高めたりすることが不可欠であると考えている学生がほとんどであることがわかる。また他人との関係性を重視し、誰からも必要とされる自分でありたいという願望が見て取れる。結婚や家庭をもつことに関しても、79.5%の学生が重要視している。「あまりあくせくせずに日々を過ごす」が 59.5%ということから、約 6 割の学生が余裕やゆとりを持った日々を過ごすことに重きをおいている。「高い地位・収入をめぐる競争で成功する」については、重要だとする学生が 41.7%と半数を下回っているおり、競争を伴う地位達成や収入の獲得には、他とは比べてやや重要度が下がっている。

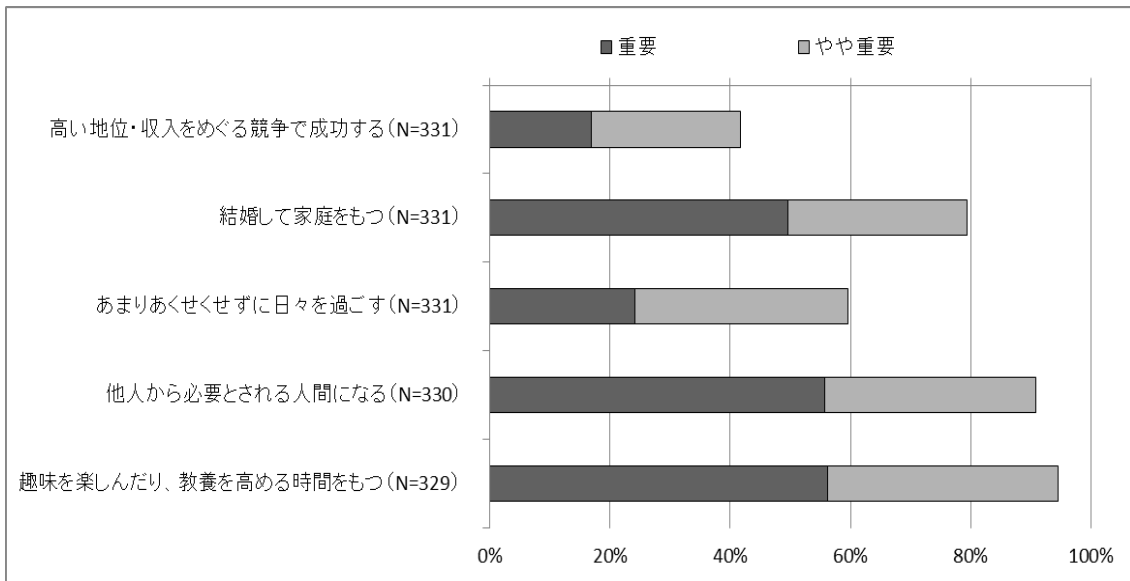


図 23 今後の生活における重要度

5. 学生生活全体の意見・感想

最後に学生生活全般についての学生の満足度や大学教育への意見、そして同志社大学や社会学部への感想についての結果について述べていく。

5-1. 学生生活全体の満足度

問 26 では学生生活全般の満足度について尋ねている。この結果としては「満足」が 61.0%、「どちらかといえば満足」が 29.9%となっており、9 割以上の学生が満足と答えている。その以外の「どちらでもない」は 6.6%、「どちらかといえば不満」は 2.1%、「不満」0.3%であった。本学・本学部での学生生活に満足した上で卒業している学生がほとんどのようである。

表 15 学生生活全体の満足度

	満足	どちらかとい えば満足	どちらともい えない	どちらかとい えば不満	不満	合計
男(N=152)	56.6%	30.3%	9.9%	2.6%	0.7%	100.0%
女(N=179)	64.8%	29.6%	3.9%	1.7%	0.0%	100.0%
合計(N=331)	61.0%	29.9%	6.6%	2.1%	0.3%	100.0%

5-2. 大学や大学教育への意見や考え

問 27 では、大学や大学教育に対する学生自身の考えを答えてもらっている。どの項目についても「そう思う」と「ややそう思う」の合計割合が高いが、特に大学教育に対する考

えと同志社大学（社会学部）に対する考え、大学での人間関係の3つに分けて提示する。

まず大学教育について、「学問的な知識よりも実用的な知識が重要だ」だと考える学生は76.7%であり、「社会に出てすぐに活かせる知識をもっと教えるべきだ」に関しては69.6%の学生が「そう思う」「ややそう思う」と答えている。この2つの項目は、大学側は学生が社会に出た時に即戦力となりうるよう養成すべきである、という考え方に対して学生自身がどう捉えているかと言い換えることができる。回答傾向としては他の項目より低いですが、7割前後の学生は実践的で社会的にニーズの高い知識や技能を習得させたほうが良いと考えている。

次に同志社大学に対する考えについてである。項目を数値が高い順に示すと、「同志社大学に進学してよかった」が96.4%で一番高く、ついで「同志社大学は自由な校風を維持すべきだ」と「社会学部に来てよかった」、「同志社大学での生活はとても楽しかった」の3つが93.4%、「同志社大学には愛着がある方だ」が87.6%、「同志社大学に来て、学問・教養の大切さがわかった」が82.8%となっている。これら6項目について、どれも「そう思う」と回答した割合が高いことから、同志社大学や社会学部自体に非常に好印象を持っていることがうかがえる。もちろん卒業できたからということかもしれないが、学生自身が入学して4年間の大学時代を有意義に過ごせたということがわかる。この想いが、現在は、87%に留まっている愛校心を更に高める可能性がある。

最後に大学での人間関係についてである。「大学では良い友人ができた」が95.8%、「大学では良い先生にめぐりあえた」が91.8%であることから、在学中に良好な人間関係を築いていることがわかる。良好な関係性にいるという安心感や帰属意識が先の同志社に対するイメージを押し上げているのかもしれない。

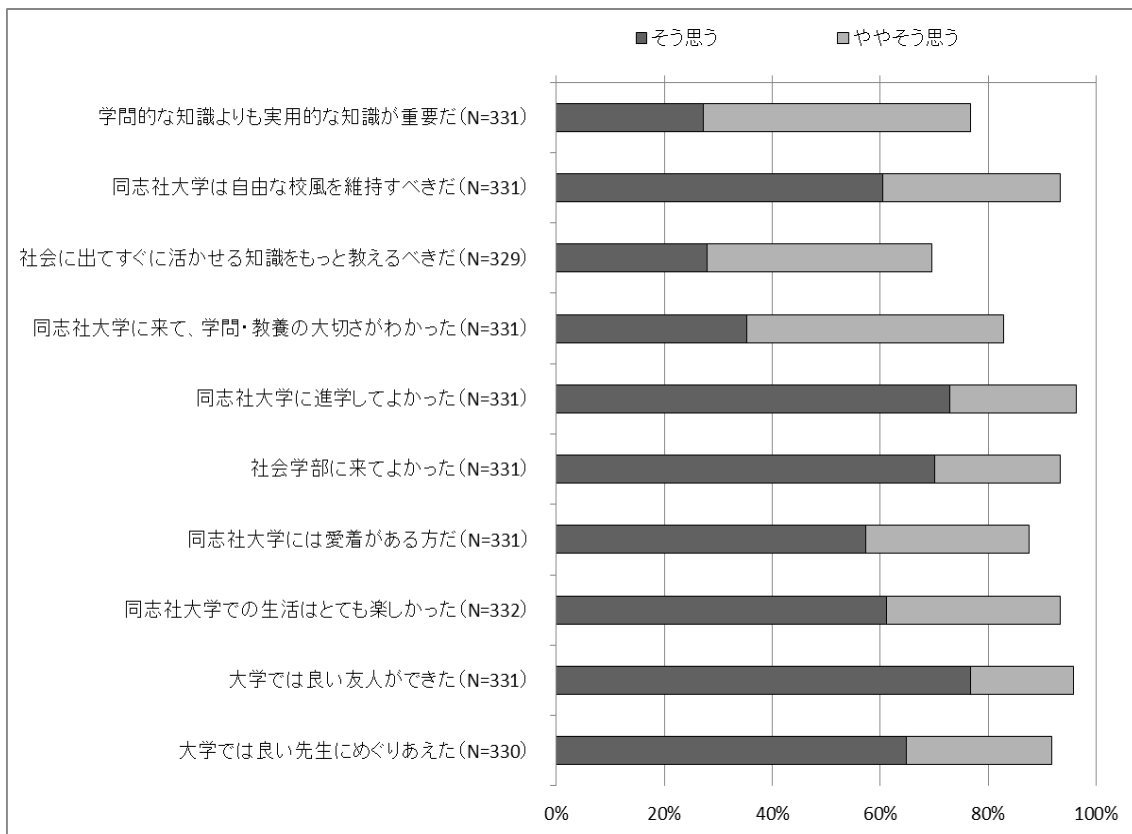


図 24 大学や大学教育への意見や考え

6. おわりに

本論では卒業生アンケートの各設問項目の回答傾向について記述してきた。

まず、学生の特徴の部分では、入試や成績に関して男女で傾向に差があることが把握している。志望順位や現役／浪人については女性の方が男性より第一志望率や現役率が高かった。入試方式では、男性は一般入試が多いのに対し、女性は一般入試の他に推薦入試等の比率が高くなっていた。大学の成績の GPA のスコアは、男性より女性の方がスコアは高い傾向にあった。

次に注目すべきところは「ゼミ活動」である。アンケートではゼミ活動は高い満足度を示しており、また学習取組みの設問でも卒業論文やゼミ発表の準備をよく取り組んでいたという回答が得られている。直接的な影響かは確認してはいるが、思考力や読解力、文書作成能力などのスキルの向上にもゼミ活動の効果はあるのではと考えられる。今後の課題として、ゼミによる教育効果については検証していく必要がある。

これ以外に特徴的なものとして、教員の評価が高い傾向にあったことである。これは授業内での学術的な交流はもちろんではあるが、授業内外での相談や助言など学生のケアやフォローが十分にできていることをうかがわせる。この結果として、問 27「良い先生にめぐりあえた」の高評価につながっているのかもしれない。

就職活動についても、問 23 の卒業後の進路の満足度を見る限り 8 割近くの学生は満足しており、様々な困難を伴う就職活動をやり遂げたことやその結果として採用にこぎ着けた就職先に納得していると考えられる。エントリーから就活終了までの就職活動期間については、半数の学生が 6 ヶ月以内に終えてはいたが、「7-12 ヶ月」かかった学生も 4 分の 1 いることから、就職活動の長期化の様相が把握できた。就職活動は学生のキャリアにとって重要なものではあるが、大学での教育や学生生活にどの程度影響を及ぼしているか、今後も見えていかねばならない。

以上が設問の回答傾向をつぶさに見ていった考察である。今後もこの種の調査を継続することによって、学生の実態をより正確に、より丁寧に把握していくことは重要である。